

繊細さと力強さを備えた 「南部細目組紋様細工」

風に親しみ、光と遊ぶ。立体的に描き出される木の紋様。

木工細工職人として日本古来の「組子」に取り組んでいた長山三蔵さんが、独自の工夫で伝統の技法を応用し、1983年に完成した南部細目組紋様細工。従来、平面であった組子に立体感をもたせ、他に類を見ない緻密かつ強度にすぐれた木工細工を生み出しました。繊細に重なりあう天然木は風をやさしく通し、木漏れ日のような光を投げかけます。岩手を代表する匠のひとりとして齢80歳を越えた今も現役で活躍を続ける父三蔵さんのもとで修行し、次代を担う技を磨く長山祐司さんにお話を伺いました。

伝統の「組子」をベースに 唯一無二の技法を開発

長山三蔵さんが南部細目組紋様細工の開発に着手したのは、日本の住宅事情の変化に合わせて和洋どちらの生活空間にも映える独自の工芸品をと思い立ったのがきっかけでした。それまで手がけてきた「組子」は、釘や接着剤を使わずに木片を組み合わせて美しい平面の模様をつくりだす、高度な職人技。それをさらに緻密な計算のもとで立体的に組み上げることで、奥深い表情

を与えるとともに、従来にはない強度をもたせることを目指しました。しかしその実現は想像以上に困難だったそうです。試行錯誤の末に、ようやく作品が完成したのは、約3年後のこと。「その日の夜、父は未っ子でまだ小さかった私も含む4人の子ども全員を工場に呼び出し、完成した衝立の前で『これからはこれでみんなにご飯を食べさせる』と宣言したんです」と祐司さんの語るエピソードからも、その苦勞と完成の喜びが伝わります。



長山工芸 長山 祐司氏 Nagayama Yuji

南部細目組紋様細工の開発者であり、現代の名工(2007)、黄綬褒章受章(2009)の栄誉に輝く長山三蔵氏の三男として、1975年岩手県に生まれる。2003年より父三蔵氏のもとで修行を開始。受け継いだ匠の技に新たな工夫を加え2016年日本民芸公募展で優秀賞を受賞するなど、今後のさらなる活躍が期待されている。



長山三蔵氏

誰もが見惚れる 豊潤な表情

南部細目組紋様細工ならではのふくらみを帯びた模様は、微妙に太さの異なる木のパーツに凹凸の切り込みを入れ、組み合わせることによってつくられます。まっすぐの木を縦横通して使いながら、構成の妙によって美しい曲線を描き出していくさまは、まるで木を編んでいるかのよう。立体的な構造ゆえに光の加減で見る角度によってさまざ

まな表情が浮かび上がります。幾重にも組まれているため、見た目の繊細さに反して高い強度があるのもインテリアとしての魅力につながっています。素材は厳選した天然の木材。2、600年前の鳥海山噴火の埋れ木をはじめ、青森ヒバ、ホオノキ、シナ、サワラなど、それぞれに色や味わいが異なり、見る人の目を惹きつけます。衝立や照明のほか、扉、建具、テーブルなど特徴を活かしてさまざまな応用でき、オーダーメイドも可能です。



祐司さんが完成させ高い評価を受けた波型の衝立。木が描くなめらかな曲線は、洋の空間にもエレガントに馴染みます。

進むべき道のない 進取の精神で

会社勤めをしていた祐司さんが家業に入ったのは28歳のとき。「実家でたまたまお客さまからの感謝の手紙を目にして、これほど人を感動させることのできる、代わりのない仕事なんだとあらためて気がついて。この技術を途絶えさせざるわけにはいかならぬと思ったんです」。木の切り出しから刃物を使った細かな細工まで、ひとつ間違えば危険を伴う仕事だけに、厳しい指導のもと夢中で精進を重ねたといいます。やがて新たな発想を取り入れるまでの技術をものに、従来の衝立に曲線を持たせた祐司さんオリジナルの「波型」を完成。日本民芸公募展初出展で優秀賞を

受賞する快挙をなしとげました。「父は『よいものは努力すればつくれる。しかし、本当に欲しいと思っただけのものをつくらないと意味がない』と言います。そのためにも、他にはないもの、生活空間で日々愛でていただけるものをつくり本物志向のお客さまのご要望にお応えしていきたいと思えます」と表情を引き締めます。親子二代で受け継ぐ真摯なものづくりへの情熱は、これからも長山工芸ならではの存在感ある逸品の創出につながっていくことでしょう。



和室はもちろんのこと現代にマッチした屏にて表現。



使用されている材料のひとつ、約2600年前の噴火の堆積物から掘り出された「鳥海山の埋れ木」。樹齢千年以上の木にしか認められない「神代ケヤキ」の名も冠する貴重なものです。自然のままの濃いグレーの風合いの美しさを祐司さんも「日本の天然木でここまで色の濃いものはなかなかありません」と語ります。



南部細目組紋様細工に惚れ込み愛用されているお客さまには、著名人や文化人も。そのおひとり、瀬戸内寂聴さんは地元の岩手県二戸市・天台寺で住職を務められていたことで(現・名誉住職)ご縁が。行燈の放つまるやかで優しい光が仏の真理である寂靜と知恵の光にも通じると、「寂光」(じゃっこう)と命名くださいました。

